

Long Term Projectsでつなぐ授業実践の理念と実際 —中高一貫カリキュラムを意識した導入期のシラバス・デザイン—

木 下 雅 仁

【抄録】 中学校1年生は、義務教育期間の中学校3年間の導入期にあたる学年である。しかし、わが国においては高等学校への進学率が90%代に到達している事実を鑑みると、事実上、外国語（英語）を中学校から高等学校にかけての6年間を通じて学習することが一般的になっている。本稿においては、中学校1年生の外国語（英語）学習を、中学校3年間の中における導入期に位置づけるのではなく、中・高6年間における導入期に位置づけ、この学年における学習の在り方について考察を進める。その際に、Long Term Projectsによって年間のシラバスを構築する授業実践の理念について検討し、筆者による授業実践例をもとにその妥当性と効果について論じていく。

【キーワード】 Long Term Projects 実践的コミュニケーション能力 communicative competence 学習動機付け 協同学習 Procedural(task-based) Syllabus シラバス・デザイン

1. はじめに

中学校や高等学校の英語教育の現場において、「実践的コミュニケーション能力」という言葉の内容や定義について議論が交わされるようになってから久しい。このことの背景には、学習指導要領の改訂（中学校は平成14年度、高等学校は平成15年度より施行）により、この言葉が、中学校と高等学校の外国語科の目標の中に盛り込まれたという経緯がある。中学校学習指導要領では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。（第9節、第1、目標）」とされ、高等学校学習指導要領では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。（第8節、第1款、目標）」とされている。

私見によると、今なお、「実践的コミュニケーション能力」という言葉の定義は定まっていないようであるが、仮に、中学校学習指導要領（外国語）解説における定義と置き換えてみると、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけでなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力」ということになる。つまり、知識だけでなく実用能力やスキルの習練・獲得にも重点を置こうという方向性が示されており、上

述の文中にあるように「実際のコミュニケーション」のために“使える”英語を身に付けることができる英語の授業を創造していくことが求められているのである。

この目標を達成するためには、英語教育の現場においては、外国語を「授業の中で」「授業中の活動として」「実際に運用する」ことが絶対条件となるのであるが、それを具体的にどのような方法によって行くと効果的であるのかという点が問題となる。

そこで筆者は、個々の教授法や指導技術を改善するよりも、ここでの目標に合ったシラバス・デザイン（Syllabus Design）を開発することに着目した。具体的には、「実践的コミュニケーション能力」の育成に直結するような種々のLong Term Projectsを考案し、それらを指導・学習過程（learning process/means）および指導・学習成果（learning product/outcomes）の視点から指導目標を具体化したシラバスに基づいて配列することによって、導入期のシラバス・デザイン作りとその実践に取り組んできた。

新しい学習指導要領においては、中学校だけでなく高等学校においても「実践的コミュニケーション能力」の養うことが目標に掲げられたことを踏まえ、本稿においては、中学校1年生の外国語（英語）学習を、単に中学校3年間の中における導入期に位置づけるのではなく、中・高6年間における導入期として位置づけ、この学年における学習の在り方についてシラバス・デザインの視点から考察を進めていく。その際に、Long Term Projectsによって年間のシラバスを構築する授業

実践の理念について検討し、筆者による授業実践例をもとにその妥当性と効果についても論じていく。

2. シラバス・デザインの理念と実際

2-1 本校の生徒の実態から

毎年4月になると「今年の1年生はいつもと様子が違うぞ」と口にされるのを耳にする。英語の授業に関しても、確かにその年その年、少しずつ生徒の様子や特徴が異なっている。実際、筆者が担当した2000年度の1年生の多くは、コンピューターを利用した授業の時には、アプリケーション・ソフトの立ち上げ方、マウスの操作の仕方、さらには文字入力の仕方までをかなりの時間をかけて個人個人フォローしなければならなかったが、2001年度の1年生は、パーソナル・コンピューターの前に座らせると、何のガイダンスも無しに黙々とキーボーディングを始めて、筆者を大いに驚かせた。

しかし、「去年の1年生はペア・ワークなどによる会話練習に喜んで取り組んだのに、今年は生徒はノリが悪いな」などと単なる印象や感覚で判断することはあまりにも乱暴な分析方法である。樋口忠彦と並松善秋(2002)は、「新入生の英語学習に対する意欲や英語の基本的な知識や運用力の傾向を概観するために、定点観測を実施」することの重要性を提唱している。そして、毎年同様の内容で継続的に調査を実施し、その年の新入生がいつもの違うのであれば、授業にそのことを反映させるべきであるとも述べている。

筆者は、同様の目的で、2000年度と2001年度の中学1年生が入学した直後に「オリエンテーション・アンケート」を実施してきた。しかし、毎年、設問内容が共通ではなかったため、この3年間の変化を分析することができないことが悔やまれる。2002年度のアンケートにおいては、特に「英語や異文化などとの接触経験」や「レディネス」に焦点を絞ってアンケートを実施した。

以下は2002年度入学生による回答(抜粋)であるが、それらの内容を眺めた上で、若干の考察を行うことにする。

◎ 小学校の時、『総合的な学習の時間』などの授業で、英語を習ったことがありますか。

- ・ はい 73人 (91.2%)
- ・ いいえ 7人 (8.8%)

◎ 上記の質問に「はい」と答えた人は答えて下さい。どんなことをしたか説明して下さい。(抜粋)

- ・ あいさつ等。
- ・ 「あいさつの仕方」や「～が好きです」の言い方。
- ・ 外国人(オーストラリア人)の先生が来てくれて歌を歌った。
- ・ 簡単な英語を歌にして歌う。
- ・ 1～12月の名前を、「ロンドン橋♪....」のリズムで歌った。
- ・ 歌やダンスを踊りながら英語を覚えていく。
- ・ 自己紹介カードなどを書いて、ゲーム感覚のことをやった。
- ・ 自己紹介(ALT交流)。
- ・ ゲーム。
- ・ 単語ゲーム。
- ・ 自己紹介ゲームをしたり、買い物ゲームをしたり。
- ・ 先生が来て英会話ゲーム。
- ・ ゲームで英語を覚える。
- ・ 外国人の先生が、ゲーム感覚で教えてくれた。
- ・ 日本人の先生が来て、ゲームをした。
- ・ 一週間くらい英語の先生が来てゲームをした。
- ・ あいさつのゲームや数字のゲームをした。
- ・ 先生が来てみんなでゲームっぽく。主にしゃべることが多い。
- ・ カルタのようなもの。
- ・ 自分の名前や物の名前当てゲーム。
- ・ 色当てゲームなど。
- ・ 英語がペラペラな日本人が来て、いろいろ遊んだ。
- ・ 基本的な1～20の数え方や1月～12月の呼び方など。
- ・ 外国人の先生がいろいろな英語を教えてくれた。
- ・ 日本人の先生だった....。食べ物の名前を絵と一緒に教えてくれた。
- ・ 動物の名前や色の名前などを教えてもらった。
- ・ 英語の映画(ビデオ)を見た。
- ・ 外国人の先生の授業で、絵の描いてあるカードを見て英語で言う授業。
- ・ 基本的なことを教えてもらった。
- ・ いろいろな英語の会話。
- ・ 買い物の仕方とか。
- ・ 英語の文章作りで遊んだ。
- ・ クリスマスカード作り。

- ・名札を作った。
- ・国際交流会。

◎ 学校以外の場所、例えば、塾や英会話スクールなどで英語を習ったことがありますか。

- ・はい 63人 (78.8%)
- ・いいえ 17人 (21.2%)

◎ 上記の質問に「はい」と答えた人は答えて下さい。今も習っていますか。

- ・はい 36人 (45.0%)
- ・いいえ 44人 (55.0%)

◎ 英語を習ったことがある人は答えて下さい。いつ頃習いましたか。

- ・中学に入学後 1人 (1.6%)
- ・6年生 21人 (33.3%)
- ・5年生 12人 (19.1%)
- ・4年生 5人 (7.9%)
- ・3年生 4人 (6.3%)
- ・2年生 3人 (4.8%)
- ・1年生 5人 (7.9%)
- ・5歳 2人 (3.2%)
- ・4歳 3人 (4.8%)
- ・3歳 1人 (1.6%)
- ・2歳 1人 (1.6%)
- ・不明 5人 (7.9%)

◎ 外国に行ったことがありますか。

- ・はい 37人 (46.2%)
- ・いいえ 43人 (53.8%)

◎ どの国や地域に行きましたか。

※ 一人の生徒が複数の国や地域を訪れているので、数字はのべ数である。

- ・グアム 13人
- ・アメリカ本土 8人
- ・韓国 7人
- ・ハワイ 7人
- ・シンガポール 4人
- ・ドイツ 3人
- ・オーストラリア 3人
- ・スイス 2人
- ・サイパン 2人
- ・中国 2人
- ・マレーシア 2人
- ・フランス 1人
- ・オーストリア 1人

- ・カナダ 1人
- ・タイ 1人
- ・ニューカレドニア 1人
- ・ニュージーランド 1人
- ・スウェーデン 1人
- ・ノルウェイ 1人
- ・デンマーク 1人
- ・フィンランド 1人
- ・イギリス 1人
- ・オランダ 1人

◎ どれくらいの期間、外国に滞在しましたか。

- ・2年間 1人
- ・1年半 1人
- ・1年間 2人 ※ 複数回海外へ渡航している生
- ・半年間 1人 の場合、一番長
- ・3週間 1人 い滞在期間を抽
- ・2週間 3人 出してある。
- ・11日間 1人
- ・7日間 11人
- ・5日間 3人
- ・4日間 5人
- ・3日間 3人
- ・不明 5人

◎ コンピューターを操作したり、インターネットを利用したことはありますか。

- ・はい 76人 (95.0%)
- ・いいえ 4人 (5.0%)

◎ コンピューターを操作したり、インターネットを利用したりすることがスムーズにできますか。

- ・完璧にできる。 13人 (16.2%)
- ・まあまあできる。 46人 (57.5%)
- ・教えてもらえばできる。 19人 (23.8%)
- ・とても不安だ。 2人 (2.5%)

(ア) 大多数を占める英語既習者

平成14 (2002) 年度から小学校においても「総合的な学習の時間」が導入され、英語学習を含めた異文化理解的・国際理解的活動に取り組む小学校も珍しくなくなると考えられているが、本校に入学してきた生徒たちの9割以上が、すでに小学校においてなんらかの形で英語学習に取り組んだ経験を持つという。生徒たちの小学校時の経験や知識・技能の蓄積を、中学校の授業とどのようにbridgingして、また、発展させるか、大いに研究を行う必要があろう。

(イ) 小学校における英語学習の内容

小学校における英語学習(早期英語学習の導入)の是非をめぐることは、いまだに議論が続いている。議論の行く末を見定めることなく、すでに多くの小学校では試行錯誤的に英語学習を導入していることがこのアンケート結果からも明らかになったが、その内容の大部分は「ゲーム(もしくは、ゲーム的活動)」であり、「英語学習」というよりは「英語楽習」を意図した体験重視のfun activityに終始している観がある。また、文字よりも音声を重視する活動が多く見られることから、英語に気軽に触れようとする姿勢や態度を育成することに一役買っていると考えられるが、その効果と定着度については明らかではない。

(ウ)「お稽古ごと」としての英語学習

小学校で英語学習が部分的に導入され、英語を学ぶことが身近に感じられるからか、あるいは、逆に不安をあおられているからか、8割近い生徒たちが中学校に入学する以前から英語を「お稽古ごと」として英語学習に取り組んだ経験を持っている。中学校の英語の授業に備えて塾に通うというのではなく、実際には英会話スクールに通う例が大多数であるが、昨今の「英会話ブーム」が小学生レベルにまで浸透してきたことの現れであろう。しかし、5・6年生から英会話を始めるケースが大多数であることから考えると、「実践的コミュニケーション能力」の育成を目指して中学校での英語授業が(おそらく)よりコミュニケーション的なものになるだろうと期待(あるいは警戒?)して、いち早くその対応に乗り出していると言えるのかもしれない。

(エ) 増加する海外渡航経験者

グアム島やハワイなどの観光地を筆頭に、海外の様々な国や地域へ渡航した経験を持つ生徒の数の多さには目を見張るものがある。また、同じ生徒が3カ国以上の複数国への渡航経験を持つ場合も珍しくないことがアンケートの結果から明らかになった。また、米国やオーストラリアなどの英語圏の国に限らず、アジア諸国やヨーロッパなど、多岐に渡る地域や国への渡航経験者も多いことから、幅広い異文化に触れた生徒が教室に存在していることになり、外国語(英語)学習のレディネス(readiness)は全体として高いことが予想される。

こうした多くの海外渡航経験者たちを含む学習者集団のニーズや要求に応えられる授業作りはどのようなものになるのかを検討し、さらには、その海外渡航者たちをinformantsとして活用する可

能性についても視野に入れておく必要があろう。

(オ) 英語教育と情報教育の融合の可能性

「コンピューターを操作したり、インターネットを利用したことはありますか」という質問に対しては95.0%の生徒が「はい」と答えている。IT化社会の熟成にともない、教育現場においてもインターネットなどの情報獲得手段や機器を活用することが一般的になりつつあるのである。英語教育の現場においても、情報教育との融合を目指した取り組みを創造していくことが必須であろう。

紙幅の都合もあり、本稿においてこれ以上アンケート結果についての考察を行うことはしない。しかし、生徒たちの異文化理解や外国語(英語)学習そのものに対する予備知識や体験、そしてレディネスなどが、全くの「白紙」状態ではないことは明らかになった。

「実践的コミュニケーション能力」を養うことを目標に掲げる新しい中学校学習指導要領においては、各領域ごとの活動に「慣れ親しみ」、「初歩的な英語を」使って「話し手の意向」「書き手の意向」を理解したり、「自分の考え」を話したり書いたりすることが目標となっている。このことから新里眞男(2001)は、「実践的コミュニケーション能力」とは、「4領域の活動に慣れ親しみ、初歩的な英語を使って相手の意向を理解したり、自分の考えなどを伝える能力」のことであると定義しているが、本校の生徒のアンケート結果からわかるように、生徒のレディネスや英語学習の経験、異文化理解の実体験がこれだけ多様で個人差があるがゆえに、「初歩的」という表現はもはや必要はないのではないかと筆者は考える。むしろ、これからの英語教育においては、個々の生徒が持つ学力やレディネスの高さや深さに応じて、それぞれの学習者が各々の伝達能力(communicative competence)を伸ばしていけるような“仕掛け”と“工夫”を伴った授業のデザインを目指していくことが求められよう。

2-2 「学習動機付け」を意識した授業づくり

安藤昭一ら(1991)は伝達能力(communicative competence)とは、「言語使用のさまざまな状況に応じてことばを適切に使いこなすことのできる能力や知識のことをいう」と定義している。その獲得を目指して、role playingやcommunication gamesに代表される「コミュニケーション的な言語活動(communicative activities)」を取り入れた授業は、多くの場合、ゲーム感覚的な面白さが誘因となって生徒個人の学習動機を一定高めるであろうが、例え

ば「1学年の間(1年間)」などの長期的な視野に立つと、果たして真の意味で生徒たちの学習動機付けを内発的に高め、さらにそれを維持していくことを可能にするのであろうかという疑問が湧く。ゲーム感覚、あるいは単発的な面白い課題を与えて知的好奇心をあおり、内発的動機付けを高めようとする手法は、英語の授業に限らず広く教育の世界に行き渡ったものであるが、例えば、英語学習の導入期にあたる中学校1年生の英語の授業で、毎時間、一年中ゲームばかりをやっているわけにはいかない(また、次第に生徒もゲームに飽きることが予想される)ことを考えると、何か別の方法によって本質的に生徒の学習動機を高め続けられる“仕掛け”や“工夫”を英語授業のデザインに取り入れることを検討することが必要になってこよう。

一般に「動機付け」と言う場合、個人における到達度と達成感に主眼がおかれるが、これからの「共生の時代」においては、集団で共に達成する喜びに基づく動機付け、他者を認める承認に基づく動機付け、自分の責任を果たし他者に役立つ喜びに基づく動機付けなどに注目をしていく必要がある。その意味では、連続的で恒常的な英語を使った協同活動を通じて、クラス集団内に活発なコミュニケーションを生みだし、それによって自分の学びが他者に影響を与えられることが認識できれば、授業のデザインの仕方によっては、英語の能力を高めるだけでなく、人間教育にさえもつながると考えられる。

この点については、新里眞男(2001)も同様の見解を持っており、新しい学習指導要領に基づく英語教科書改訂の特徴は、生徒の自己表現の機会が大幅に増えたことであると指摘した上で、次のように述べている。「この(生徒の自己表現の)機会を本当に生かすためには、普段の授業での雰囲気作りが大切になる。クラスの友達の発言内容に耳を傾け、協力して活動を行うことができれば、このような特徴は生かされない。逆に言うと、このような教科書を使いながら、お互いの自己表現を尊重するような暖かい(ママ)人間関係作りに向かいたいものである。」

ところで、動機付けを何よりも優先するがあまり、教科書の内容を離れて、いわゆる“投げ込み教材”や“投げ込み活動”を取り入れて、外国人との国際交流会などの異文化理解のイベントを行って見たとか、ディベートに取り組んでみたなどといったように、一時的(つまり、特別に1時間だけ授業を割いたり、定期テスト後の余った授業時間を利用したりして)単発的な“打ち上げ花火”型のコミュニケーション活動を行った実践例を目にすることがある。

しかし、そのような「イベント」方式では、教科書内容の学習の流れを分断しがちである上に、教科書の内容との系統性や関連性が薄くなってしまう。そのように一過性の強い学習活動は、生徒にとっては印象深く、なんらかの「学習体験」にはなっても、「学習経験の積み上げ」にはなりにくいのではないであろうか。

そこで筆者は、2000年度・2001年度・2002年度の3年間、導入期にある中学1年生を担当し、Long Term Projectsを通じて1年間の授業をつなぎ合わせたシラバスをデザインし、それにしたがって授業作りの実践を行ってきた。毎授業時間に、その時期に学習している教科書の内容やターゲットにしたい学習スキルに関わる活動を短時間取り入れ、ミクロ的には1時間の授業を「Project」と「教科書内容の学習」との二部構成にする。マクロ的に1年間の授業シラバスを眺めてみると、Long Term Projectsによって個々の授業をつなげつつ、様々なコミュニケーション・スキル・トレーニングを網羅的に取り組んでいくという“仕掛け”を用意し、生徒たちに対する学習の動機付けを長期的に高め、そして維持しようとしている。

その際、教科書内容の学習をネグレクトせず、*New Crown English Series 1*(三省堂、2000~2001年度)と*Sunshine English Course 1*(開隆堂出版、2002年度)の題材を最大限活用し、知識面は主に教科書を用いて堅実にbuilding upしながら、スキル面に関してはprojectsを通じてどんどんとプラスαの実践的活動を行う機会を生み出していく。先述のように、伝達能力(communicative competence)が、言語使用のさまざまな状況に応じてことばを適切に使いこなすことのできる「能力」や「知識」のことをいうと定義されていることから、「知識面」と「スキル面」を両輪とするバランスの取れた授業のデザインを心がけており、この取り組みもほぼ軌道に乗りつつある。

2-3 スキル獲得を重視したシラバスの理念

これまでわれわれ英語教師の多くは、「3人称・単数・現在形」の概念をどのように導入するかや「未来形の表現を用いた表現活動に関しては、どのようなものが有効か」などと、個々の言語項目に関する知識や技能の理解と定着の促進を考える際、「リスニング活動をベースにこんな導入を行って見た」とか「ライティング活動をベースにこのようなアイデアが面白いのではないか」などと、どちらかといえば個別的な方法論に着目した議論にとらわれすぎていた嫌いがある。

U n i t	基本文型など	題材・内容
1. ようこそ、グリーン先生 p.12	I am ... You are / Are you ...?	あいさつ・自己紹介をしよう 相手を確認めよう どこの国から？
2. 学校で p.18	This is ... / That is ... Is that ...? He is ... / She is ...	校内を案内しよう あの建物は？ 人を紹介しよう
3. グリーン先生の初授業 p.26	I like Do you play ... ? I do not have ...	自己紹介をしよう インタビューをしよう
4. 日本大好き p.34	What is this? English is interesting. What do you have ...?	これは何？ 好きな教科は？ 朝食は何？
5. ハンバーガーショップで p.42	two hamburgers How many ...? Let's ... / Use ...	注文をしよう テレビとマンガ本 提案・申し出・指示をしよう
6. 南半球からのメール p.50	Becky likes ... Does she write ...? Becky does not use ...	人について紹介しよう メールを見て
7. アメリカの学校から p.58	What time ...? Who ...?	世界の時刻 ホームページを見て アメリカのある中学校
8. 旅立ちの日 p.68	Where ...? Whose ...? him、 her	ものをさがそう だれのもの？ あの人知ってる？
9. ようこそオーストラリアへ p.74	Ken is playing ... What are they doing? Don't drive ... / Be ...	何をしている？ 目的地に着いて指示をしよう
10. 夏の冬休み p.82	I can [cannot]swim ... Can you swim ...? When ... ?	近況を述べよう 観光地で 星空を見て
11. それぞれのお正月 p.94	I walked ... I went ... Did you ...? / I did not ...	旅先からの頼り よいお年を！ 冬休みはどうだった？

資料1 中学1年生 検定教科書 内容一覧(例)

資料出典：笠島準一他(2002) *NEW HORIZON English Course 1*、東京書籍。

また、一般に多くの中学校の検定教科書は、文法・構造・語彙に関わる概念が、平易なものから複雑なものへと段階的に配列される「文法・構造シラバス(grammatical / structural syllabus)」に基づいて、言語内容や学習内容が選択・配置されたデザインとなっている。それは新出事項が既出事項と関連づけられながら導入され、さらに学習を発展的に展開できるという指導効率の高さを生み出す反面、文法・構造および語彙が実際のコミュニケーション活動においてどのように使われるのかが十分に考慮されて

いるとは言い難い。その結果、教科書の各課で扱われている題材(テーマやトピックス)に関しては、多くの場合、衣食住、スポーツ、異文化理解、言語文化、物語、インターネットなど、多様ではあるが特に系統性のない配列となっている。

現在のところ最も採択率の高い検定教科書の一冊である*NEW HORIZON English Course 1*を例に取って、その内容を分析してみると分かるように、「実践的コミュニケーション能力」を養うことを目指して今年度改訂されたばかりの教科書の内容も、資料

学年	区分	目標	内 容	活動	
				活動のねらい	活動例
中学 1 年 生	入門 基 礎 期	・身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行なう。 ・自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるようにする。	リスニング ●強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取る スピーキング ●強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音する。 リーディング ●文字や符号を識別し、正しく読む ライティング ●文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書く <使用場面> あいさつ、食事、自己紹介、飛行機の機内、電話の基本的会話表現、買い物、など <言語の働き> 説明する、質問する、礼を言う、驚きを表す、あいづち、謝る、依頼する、提案する、依頼する、など	英語の音声とアルファベットに慣れる	フォニックス
				物の名前を英語で発音する	実物や絵を見て英語で話す
				ゲームや歌を通して英語を学ぶ	英語のゲーム・歌
				英語のリズム、イントネーションに慣れる	Jazz Chantz
				自分の名前を伝えたり相手の名前をたずねる	あいさつ、自己紹介、趣味などを話す
				友達にEメールで近況を説明する	Eメールを書く
				英文を暗記して語る	暗唱
				英語を使ってカードをつくる	グリーティングカード作り
				自己学習力を身につける	NHKラジオ新基礎英語1
				短い会話を作ってペアで発表する	スキット作り

資料2 本校英語科作成の中学1年生 外国語(英語)科 シラバス

資料出典：2001年度名古屋大学教育学部附属中・高等学校 中等教育研究協議会資料 教科別シラバス案

1に見られるように、依然として「文法・構造シラバス (grammatical / structural syllabus)」に基づいて、言語内容や学習内容が選択・配置されたデザインとなっており、題材(テーマやトピックス)に関しても、「学校生活」「日本大好き(日本文化：折り紙)」「ハンバーガーショップで」「南半球からのメール」「アメリカの学校から」などの順番に登場するが、「日本から世界へ」目を向ける流れは確認できるものの、それぞれの題材間に関連が薄く、ターゲットとなっている言語材料を扱うために題材を「後付け」している観がぬぐえない。

また、「そのような題材に触れ、ターゲットとされる言語事項を学習する」ことは明確であるとしても、それらの知識を使って具体的に「どのような学習経験を積み」「何が出来るようになるのか」というgoalsについては明らかにされていない。また、「あいさつ・自己紹介をしよう」「相手を確かめよう」「校内を案内しよう」「人を紹介しよう」「インタビューをしよう」「注文をしよう」「提案・申し出・指示をしよう」「人について紹介しよう」「ものをさがそう」「指示をしよう」「近況を述べよう」などのsituationalな題材の組み合わせ及び配列によるシラ

バス・デザインからは、個別的で特定のsituationに対応できるskillsやknowledgeの獲得を目指して、situationに応じた様々なtaskやactivityを通じて学習を進めることが志向されていると言えよう。

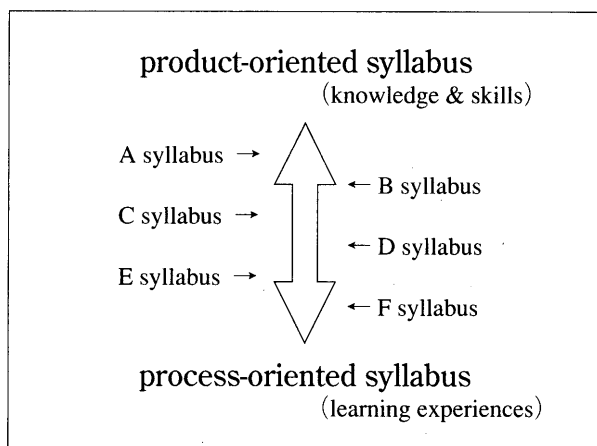
同様に、資料2に示された本校英語科が作成したシラバスも、skills獲得を明確に志向したシラバス・デザインであると言えるが、義務教育期の中学1年生用のシラバスであるにも関わらず、教科書の題材との関連が明確にされていないという問題点を抱えている。また、シラバス中に示された活動例がどのような順序や段階にしたがって配列されるのかについても明らかにされる必要があろう。

2-4 Long Term Projectsによるシラバス

2-3で取り上げられた二つのシラバスの例は、いわゆるプロダクト志向 (product oriented) のシラバスの例であった。Nunan (1999) は次のように述べ、シラバスの性質がどのような要素によって決定づけられるかについて概説し、プロダクト志向とプロセス志向のシラバスを区別している。「シラバスというものは、次に挙げる要素のうちのすべて、あるいは、一部を明確に志向するであろう。文法構造

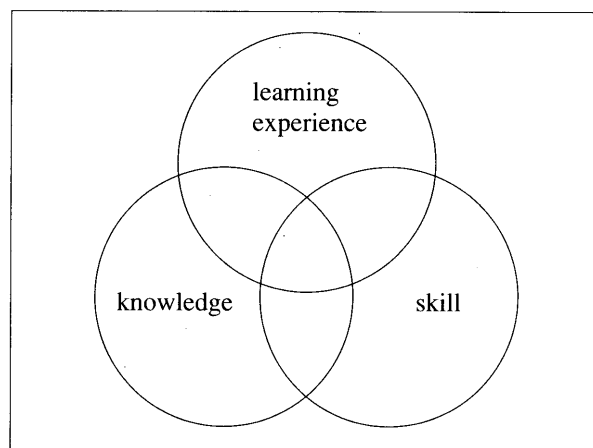
(grammatical structures)、機能 (functions)、概念 (notions)、トピックス (topics)、テーマ (themes)、状況 (situations)、活動 (activities)、そして、タスク (tasks) などである。これらの要素のそれぞれが、プロダクト志向 (product oriented) かプロセス志向 (process oriented) のどちらかに分類され、言語の性質、学習者のニーズ、あるいは、学習の性質に対する考え方に応じてどの要素を包摂するかについての妥当性が決定づけられるのである。」また、Nunanによると、プロダクト・シラバス (product syllabus) は指導の結果として「学習者が獲得すべき知識 (knowledge) やスキル (skills)」に焦点を当てたシラバスであり、プロセス・シラバス (process syllabus) は、同様に「学習経験 (learning experiences)」それ自体に焦点を当てたものであると区別されるという。

資料3に示す通り、通常、どのスタイルのシラバスにおいてもプロダクト志向のシラバス (product-oriented syllabus) とプロセス志向 (process-oriented syllabus) を両極とした連続体の流れの中のどこかに位置することになると考えられる。



資料3 product-oriented / process-oriented syllabus

しかし、本稿で取り上げている「Long Term Projectsでつなぐシラバス・デザイン」においては、資料4に示すように、個々のprojectに取り組む際に、「知識 (knowledge)」「スキル (skills)」「学習経験 (learning experiences)」の3者の獲得が同時に目指されている。プロダクト志向のシラバス (product-oriented syllabus) では、「知識 (knowledge)」と「スキル (skills)」のみに焦点が当てられ、プロセス志向のシラバス (process-oriented syllabus) では、「学習経験 (learning experiences)」のみに焦点が当てられる、などと「プロダクト」と「プロセス」を二極化された対立概念として捉えて、どちらかにバイアスのかかったシラバスをイメージするのではなく、project



資料4 知識・スキル・学習経験の融合モデル

への取り組みを通じて「知識 (knowledge)」や「スキル (skills)」が磨き上げられて行き、projectを完了することによって「学習経験 (learning experiences)」が積み重ねられるというのがこの「Long Term Projectsでつなぐシラバス・デザイン」の特徴として指摘できよう。

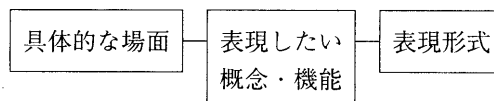
2-5 導入期の指導で重要視されるべきこと

松畑熙一 (1992) は、学校における英語の授業について、「始めだけおいしい味がしていたのに、かんでいるうちにすぐ味がなくなり、あごがだるくてはき出したのに『せめて入試がすむまでは』と、ひたすらかみ続けさせるようなことはやめさせたい。できるだけ長続きする味、ときどき新たな味を添加してゆく英語学習をめざしたいものである」と述べ、英語が「チューインガム教科」の汚名を受けないようにするために、中学校入門期の英語学習が持つ具体的意味を次の5種類に分け強調している。

①生きた英語のリズム感 (音感)・語感の基礎を養う

入門期で最も重要なことは、英語の自然な音声の流れに馴れさせることである。それには、できるだけリズム感豊かなまとまりのある英語の文を聞かせ、「聴覚像」(acoustic image)をつける努力をすることが大切である。

②ことばの生きている姿にできるだけふれさせる
英語の表現を中心とし、単語から文への流れでなく、文表現という全体の中で部分をおさえていき、次の3者間の結びつきを高める努力をしたいものである。



③英語を学ぶことの意義・重要性・喜びの実感

「日本人が、外国語として、英語を学ぶ」というつながりをできるだけ具体例を通して実感できるようにする。

④英語と「自分」との結びつきを高める

英語学習が単なる「教科」の対象であったり、外国への憧れに終わらないためにも、身近にひきつけて英語を学んでゆくことを重視したい。日本を舞台にし、自己表現から始めてだんだんと世界へと広がってゆく形が望ましい。

⑤英語学習の学び方と学習習慣

音声を中心とした語感を養うために少しずつでも毎日英語にふれるような学習習慣をつけたい。

松畑は、「入門期英語学習は、それから何年間も続いてゆく英語学習の動機づけ・方向づけをする『オリエンテーション』としての意味を豊に持っている」と考える立場に立ち、上述のような中学校入門期の英語学習が持つ具体的意味を挙げているが、これらの要素を押さえるだけで、英語が「チューインガム教科」の汚名を受けなくて済むかどうかは甚だ疑わしい。松畑の視点をまとめると、①英語の音声、②英語の言語学的構造、③英語学習の意義、④「身の回りから世界へ」の視点の流れ、そして⑤学習習慣形成（特に音声面のトレーニング）を重視する立場に他ならないが、言語学的視点にとらわれすぎている嫌いがある。

しかし、シラバスをデザインする際には、Nunan (1999) が指摘しているように、言語学の視点 (linguistic perspective) だけではなく、学習者の視点 (learner perspective) や学習の視点 (learning perspective) から、ターゲットとする学習者に対して、どのようなシラバスが望ましいのか指導者は自問自答していく必要がある。言語学の視点からは「どのような言語学的要素が教えられるべきなのか」という疑問がわき起こるだろうし、学習者の視点からは、「学習者は、この言語(英語)を使って何をしたいのか」について明確にしておきたい。この3つの視点は、それぞれが相互に排他的に扱われるべきではなく、むしろ、それぞれを尊重し、さらには融合的にシラバスをデザインする視点として取り扱われるべきものであろう。

ここで筆者は、Nunanが示した「言語学の視点」「学習者の視点」「学習の視点」の3つを踏まえた上で、中学校入門期の英語学習で押さえておくべき項目を

整理してみることにする。

- ・英語辞書（英和辞典・和英辞典）の活用の仕方（辞書指導）
- ・文字と音声との関係（フォニックス的な視点からの音声指導）
- ・イントネーションやアクセント、語と語の音の連結など
- ・アイ・コンタクトやジェスチャー、フェイシャル・エクスペッションなどを中心とする non-verbal なコミュニケーション・スキル
- ・劇やスキット、レシテーションを含む創作活動と、その発表・鑑賞
- ・手紙や自己紹介文をはじめとするクリエイティブ・ライティングの活動
- ・インターネット上での情報検索を含む、コンピュータのオペレーティングとキーボーディング
- ・発展的学習活動としての異文化理解教育・国際理解教育・開発教育
- ・ニュース放送などのまとまった量の英文を聴き、情報収集活動だけでなく、内容を味わおうとする主体的リスニング力の養成

ここで挙げた項目は、「知識的な学習内容」ではなく「学習スキル」的な性質のものばかりである。このような活動に1年生で取り組んでおけば、2年生以降、あるいは、高校生になっても、同じ「学習スキル」を用いて、複雑化・高度化した新たな学習内容を加工していけるであろう。

必修科目として英語という科目を初めて学習する中学校1年生の授業においては、「三人称単数現在形のsの用法を完璧にマスターさせたい」などの文法知識的な視点よりもむしろ、その「三人称単数現在形のs」を用いて、どのような学習活動を行い、また実際にどのような学習経験によって「三人称単数現在形のs」を必要とする体験をさせてやるかという視点の方が、より実践的かつ有用であると筆者は考える。

こうした理念を活かす具体的方策として、Long Term Projectsをつないで年間のシラバスをデザインする授業方法を筆者は考案した。資料5はproject概要の一例であるが、こうしたLong Term Projectを切れ目無く配列し1年間のシラバスを構築する指導法の特徴と理念を整理すると以下ようになる。

①方法としての「協同学習」

昨今の教育界においては、「個性尊重」や「個別指導」など、「個」に対する対応を重視する

Project名	PROJECTIV Recitation Contest ～My Family～
内 容	自分の家族に関する英詩を創作し、暗記してクラスメートたちの前で発表する。
取り組みの時期	2002年 9 月（授業 1 回=内容説明と準備、授業の最初の10分×授業 3 回）
教科書との関連	Program 6 同じこと、違うこと（pp.48-53） <i>Sunshine English Course 1</i> 開隆堂
活動内容と目的	①キーセンテンスである Nancy likes oranges too. (p.48) の内容と文法事項（3 人称 単数現在形）について知り、自己表現活動において使うことが出来るようになる。 ②キーセンテンス及び既習の文型を用いて、簡単な英詩を創作する。 ③完成した英詩を何度も音読練習し、気持ちを込めて丁寧な発音で読み上げることが出来る。 ④英詩を暗唱発表する活動を通じて、パブリック・スピーチのマナーについて知る。 ⑤友だちの英詩の発表を聞き、鑑賞する態度を養う。
言語学的視点 (linguistic perspective)	・三人称単数現在形 Nancy likes oranges too. (p.48) ・I が主語の一般動詞を含む文型 I play the piano. (p.38) ・There are ～ people in my family. の構文（未習事項）
学習者の視点 (learner perspective)	・英和辞典や和英辞典を活用しながら英詩を創作する。 ・詩の朗読方法を工夫し、正確で丁寧な発音で読み上げる（暗唱する）ことが出来る。 ・英和辞典や和英辞典を活用しながら英詩を創作する。 ・パブリック・スピーチのマナーを学び、人前で堂々と英語で発表を行うことができる。
学習的視点 (learning perspective)	・題材としての英詩（及びそのフォーマット）に触れる。 ・My Familyをテーマに、自作の英詩創作に挑戦する。 ・英和辞典と和英辞典の活用方法に慣れる。 ・協同学習としてのグループでの英詩の原稿作成の活動。 ・自作の英詩を暗唱し、人前で発表する。 ・他人の発表を鑑賞し、詩の内容や発音などについて今後の参考にする。

資料 5 Projectの一例と導入期指導の理念

観点がもてはやされる風潮がある。ところが、あまり個別的に学習を行うよりはむしろ、「学校の教室」で行うからこそ可能な「協同学習」の要素を重視している。このLong Term Projectsの取り組みにおいては、projectの準備から発表、相互評価・鑑賞に至るまでの全過程において、ある種の「協同学習」的な要素が盛り込まれており、「共に学ぶ」中で、知識やスキル獲得において生徒の「気づき」を促進することが意図されている。

② “Same Task, Different Activity” の実現

通常、授業の中で短時間で取り組まれる activityの多くは、一過性が強くその場限りの単発的活動に終わることが多い。そうであるがゆえに、pattern practice的な性質から抜け出すことが困難である。例えば、Whoseを用いて所有者について尋ねる会話練習において、“Whose pen is it?” と尋ねると、“It's Mike's pen.” などというような「用意された返答」を誰もがオウム返しのように行うだけである。

ところがLong Term Projectにおいては、クラ

スの生徒全員が同時期に同じ課題（same task）に取り組むが、個々の生徒の能力や興味関心に応じてprojectの内容や仕上がり具合を深められるので、learning outcomeとしてのproductionは多種多様（different activities）である。このことが実現されていることから、ある意味では「協同学習としてのLong Term Projects」は個への十分な対応が可能な教授法のひとつであると言えるかもしれない。

③教科書の学習内容の尊重と活用

Long Term Projectsをシラバスの中に配置する際には、検定教科書の言語項目や題材の配列を尊重し、教科書を用いて学習した内容や題材（テーマ）との関連性を重視する。

④継続性・連続性の重視

「教科書の学習内容とprojectとは別の物」という意識を生徒に持たせないようにするために、教科書の内容の学習とLong Term Projectsとは並行して行うことにしている。単発的に「ディベートを行った」とか「インターネットを体験した」となど「イベント方式」で活動を行うの

ではなく、主に授業の最初5～10分をprojectに関わる時間に割り、残りの時間は教科書の内容の学習に当てる。

本校の中学1年生のカリキュラムにおいては、学校週5日制導入の前後とも英語は4単位確保されているという強力な利点も背景にあるが、通常、projectの解説やオリエンテーションには1時間(授業1コマ)ほど時間を割くが、作業の大部分は基本的には授業外の時間を使って、生徒たちが個々に準備をすることが前提となる。そして、projectの軌道修正や補助的支援、そして発表などについては、各授業の最初の時間に継続的に実施する。そして、一つのprojectが終了すれば、また次のprojectの準備に入るという連続性を重視し、生徒の学習スキルの獲得とlistening、speaking、reading、writingなどの技能の習練がスパイラルな形で持続できるような仕掛けを用意している。

⑤ learning outcomesとしての発表・相互評価・鑑賞

projectの準備段階の大部分は個別的に実施するものの、最終的には必ずクラス全体で発表の機会を持ち、生徒たちが相互に評価し合ったり鑑賞し合ったりして、自分の発表や作品の評価について、一定のフィードバックが得られることを保証している。

また、通常の一斉授業における細かなactivityを実施する際には、授業者が生徒のperformanceの評価やモニターを十分に行うことが困難であることが多い。しかし、このようなprojectの発表会を実施することによって、生徒一人一人のパフォーマンスをじっくりと評価したりモニターすることができる。

⑥ 「自己評価」の材料としてのprojects

高橋勝義(2001)は、こうしたproject型学習を次のように定義している。「子どものコミュニケーション能力や問題解決技能、意志決定技能等の発達を診断するためによく用いられる手法であり、具体的には、個人やグループで、学校内や家庭内で、例えば模型や地図を作ったり、絵やグラフを書いたり、切り絵をしたり、写真撮り、演劇、映画づくり、ビデオづくり等の諸活動(課題)が課されることになる。」

言うまでもなく、この高橋の視点は、生徒の学習成果を評価する手段としてポートフォリオを作成する際の材料を得る手段の一つとして、プロジェクトを実施し、そこから作業実績(performance)サンプルを得ようとする立場から生み出されている。Long Term Projectsにお

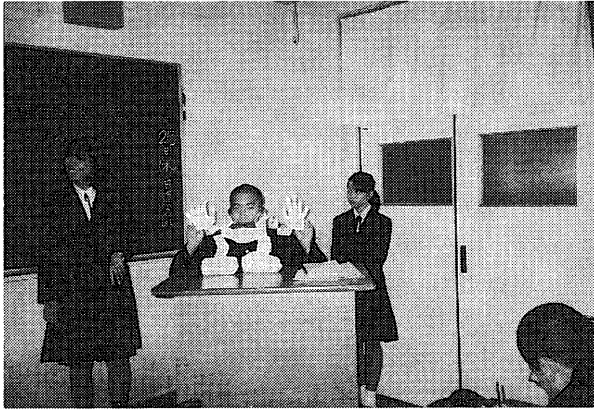
いても、各projectごとに何らかの課題・作品制作や創作発表(すべてビデオ収録される)などが伴うので、learning outcomesとしての生徒の作業実績(performance)を筆者は評価の材料として活用している。

しかし、筆者はそのこととは別に、こうしたprojectの取り組み過程と生徒の作業実績(performance)を、個々の生徒たちが「自己評価」を行うための生徒自らのためのポートフォリオ学習の材料として見なしている。小田勝巳(2001)が言うように、「自己評価」は、自分の思考や作品の長所・短所を見いだすことでもあるから、きわめて自己修正的でもある。通常の授業においては、定期テストや小テストを除くと、「学習の成果」や「学習の足跡」とも呼ぶべき生徒の学習実績(performance)は、ほとんど残されることがない。一方、Long Term Projectsでは、生徒たちはprojectの数だけ自分たちの作業実績(performance)を蓄積していくことになり、それらを後々ふり返ったり、見直したりして冷静に自己評価を行うことができる。また、先述の小田勝巳は、「子どもたちが、自分の作品の中から『自分にとって重要な作品』を選び出し、それを教師に伝えるということは、ひとつの大きな伝達行動として着目する必要があるだろう」とも指摘していることもあり、筆者は、Long Term Projectsが生徒の主体的自己評価活動を促す効果を持っていると考えている。

導入期としての中学1年生においては、単に知識やスキル、学習経験を積み重ねるだけでなく、自らの学習をモニターしたり評価したりする姿勢やスキルをも獲得できるシラバスをデザインしたい。「Long Term Projectsでつなぐシラバス」はその理念型に近いものであると筆者は考えている。

3. プロジェクト型学習の実践

本章の3-1において2000-2001年の実践の全体像を振り返り、3-2、3-3、3-4、3-5において2002年度前期の実践を振り返ることとする。2000-2001年度は旧中学校学習指導要領に基づいた検定教科書*New Crown English Series 1*(三省堂)を使用していた。平成14年4月に新中学校学習指導要領が施行され、本校では新課程の教科書として*Sunshine English Course 1*(開隆堂出版)を採用したことから、Long Term Projectsの内容を使用する教科書に合わせて変更する必要が生じた。



3-1 2000-2001年度のLong Term Projects

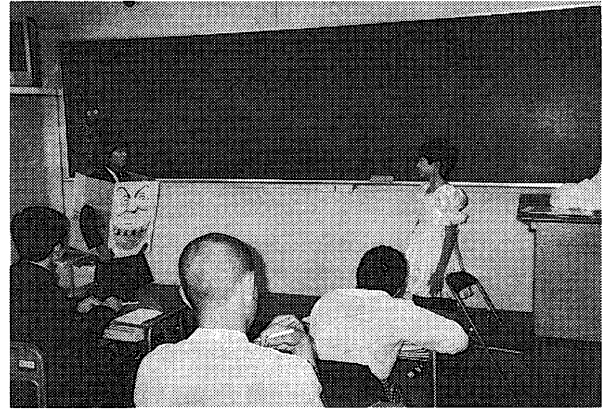
資料6は、2000年度と2001年度に共通して実施した「Long Term Projectsでつなぐシラバス・デザイン」の全体像のイメージ・チャートと内容概要である。以下に各projectについて若干の補足説明を加えておきたい。

①「ちょっとお気に入りの一品～Show & Tell I～」および②「英語で自己紹介をしよう！」においては、「発表原稿を作成する力（英作文力）」「原稿を音読練習し、発音・アクセントなどを洗練する力（スピーキング力）」「発表原稿集を読み、内容を鑑賞する力（読解力）」「友だちの発表を鑑賞する力（聴解力）」「英和辞典・和英辞典の活用能力」などが獲得されるようなprojectを企画した。

③「インターネットは世界を結ぶ～異文化紹介プロジェクト～」を通しては、「コンピューターやインターネットの操作知識の獲得」「インターネット上での情報検索能力」「ウェブ上の情報解釈力（英文読解力）」「ポスター発表によるプレゼンテーション能力」などを獲得することが目指された。

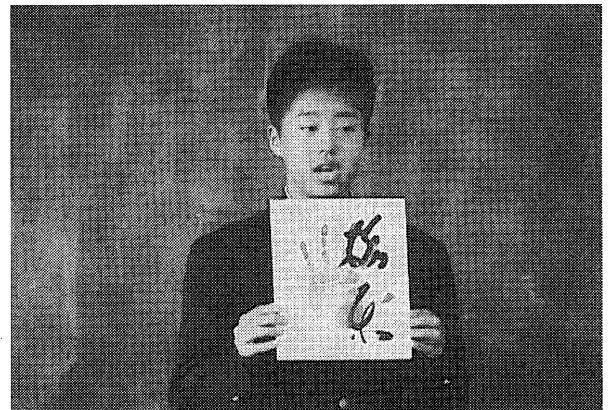
④「スキット・コンテスト」と⑤「名声優を目指せ！～ラジオ・ドラマ製作～」の両プロジェクトの特徴は、グループによる準備と発表を行う点である。ある程度個人レベルで基本的な英語学習・運用スキルが定着したら、グループによる協同学習のステージに入る。ここでは、スピーキング練習のまとめとして、子音を中心とする音素の正確で流暢な発音、音の連結、アクセントやイントネーションに至るまで、細部に渡ってスピーキング力を磨き上げる。また、eye contactやfacial expressionなどの自然なコミュニケーションに求められるmannersについてもトレーニングする。加えて、グループごとに工夫して衣装や小道具、効果音などを用意した上で発表会を行うことによって、楽しく英語を使った活動に取り組む姿勢と創造力を養う。

⑥「笑いの英語学習 English Riddles」においては、“Question: What is the capital of England ?” (Answer:

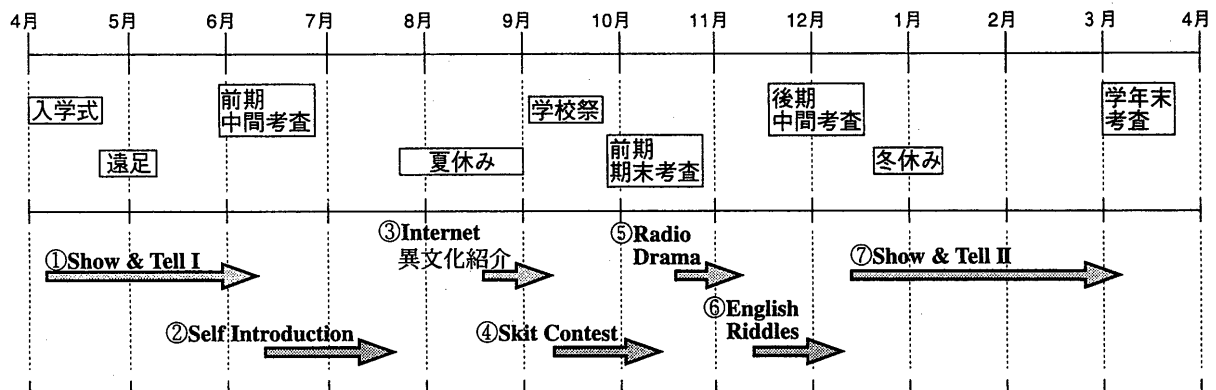


The letter E is.) のような英語のriddlesや言葉遊びを楽しむのであるが、正確に発音しないと聞いている方には伝わらないし、聞く方においても静聴しないとなどなかなか自分が把握できないので、accuracyにこだわったintensive listening /speaking の活動を行う絶好の機会となった。

⑦「日本文化紹介～Show&Tell II～」においては、①～⑥のLong Term Projectsおよび年間の総合的な学習成果の確認を兼ねて、再びShow and Tellの活動を行う。題材選びや原稿作成から発表まで、speaking / listening / writing / readingの4技能においてバランスのとれた総合的英語運用力を駆使することが求められる。取り上げる対象物を「日本の文化」に関わるものに限定し、身近に存在する事物の情報を簡単な英語で表現できるようになることを目標とした。



《Long Term Projects につなぐ1年間の活動実践例(中学1年生)》



(注: この実践は平成9年度版NEW CROWN Iを使用して
います)

(A)・・・所要授業時間	(B)・・・Target Skills
(C)・・・内容と方法	(D)・・・教科書との関連

①「ちょっとお気に入りの一品～Show & Tell I～」 “I Have a Judo uniform”

- (A): 6時間。うち1時間は説明と準備。授業最初の15分使用。
(B): Writing, Reading, Speaking, Listening
(C): 自分の宝物を持参し、簡単な英語で紹介をする。「なぜ好きなのか」あるいは「その品物にまつわるエピソード」について必ず触れること。
(D): 教科書pp.26-30, Let's Try 1, Lesson 4

②「英語で自己紹介をしよう！」“Self Introduction”

- (A): 4時間。1時間は丸ごと英作文の作業に。残りは授業最初の各15分で発表。
(B): Writing, Reading, Speaking, Listening
(C): 教科書のモデル文とALTのモデルを参考に。書いた後は読む練習をして、クラスの前で堂々と発表する。
(D): 教科書pp.31-33, Let's Try 2, Let's Write 1

③「インターネットは世界を結ぶ～異文化紹介プロジェクト～」“Do You Like Festivals?”

- (A): 6時間。うち、2時間はインターネット検索に使う。
(B): Writing, Reading
(C): 世界の好きな国や地域から1つの題材を選び、インターネットで情報検索をして、それをポスター化する。ポスター発表。
(例)「アフリカの楽器」「パリのエッフェル塔」「南極のペンギン」「韓国のロッセ・ワールド」etc...
(D): 教科書pp.34-37, Lesson 5

④「スキット・コンテスト」“A Miller and a King”

- (A): 3時間。授業最初の各15分使用。
(B): Listening, Speaking
(C): 4人一組でグループを作り、スキット発表と鑑賞。衣装や小道具も用意。
(D): 教科書pp.38-41, Let's Talk 2, Let's Listen 1, Let's Read 1

⑤「名声優を目指せ！～ラジオ・ドラマ製作～」

- “Alice and Humpty”
(A): 4時間。授業最初の各10分使用。
(B): Listening, Speaking
(C): 4人一組でグループを作り、ラジオドラマ風に声色や声の調子を工夫して、物語をみんなに聴いてもらう。
(D): 教科書pp.42-47, Lesson 6, Let's talk 3

⑥「笑いの英語学習 English Riddles」

- “English and Japanese”
(A): 6時間。授業最初の8分。
(B): Writing, Speaking, Listening
(C): インターネットを使ったり、図書館で調べたりして、「なぜなぜ」を調査。英語のなぜなぜでもよいし、日本語のなぜなぜでもよいので、画用紙にポスターとして書き、一人ずつ発表。クラスで品評会をする。
(D): 教科書pp.48-55, Lesson 7, Let's Listen 2, Let's Talk 4

⑦「日本文化紹介～Show&Tell II～」

- (A): 11時間。授業最初の6分。
(B): Speaking, Writing, Listening
(C): 日本にしかない身近なものを紹介
(D): 教科書pp.88-89, Let's Read 3

資料6 2000-2001年度の中学1年生のLong Term Projectsイメージ・チャート

資料出典: 木下雅仁 (2002)「Long Term Projectsにつなぐ導入期の授業デザイン」

『三省堂英語教育・中学別冊』三省堂

3-2 アルファベットの導入と辞書調査の授業実践

(1)課題名

Dictionary = 「字引く書なり」

(2)対象生徒

2002年度 中学1年生

A組 (男子20名、女子20名)

B組 (男子20名、女子20名)

(3)活動の目標

- ・ アルファベットの文字 (大文字・小文字) に親しむ。
- ・ アルファベット順を覚える。
- ・ ペアワークにより、英和辞典の調査を行い、英和辞典に親しむきっかけを得る。

(4)時間配当

1 時間目：プロジェクト内容の解説、手順の説明、ワークシートの配布。

(5)プロジェクトの進行手順と内容

- ①隣の席の生徒とペアを組み、席を引っ付ける。
- ②各自の英和辞典を用意する。たいていの生徒は学校指定の『初級クラウン英和辞典』(第10版、2002年、三省堂)を使用している。
- ③アルファベットのAからZまでの発音練習を行い、「アルファベット順」について確認する。
- ④各自の英和辞典の小口 (edge:本の切断面) に色づけされているAからZまでのページを眺め、どのアルファベットから始まる英単語の数が多いのか、また、逆にどのアルファベットから始まる英単語の数は少ないのか、それぞれ「トップ5」の予想を立て、ペアで意見交換する。
- ⑤ワークシートに予想が記入できたら、ペアで協力してそれぞれのアルファベットに何ページが割かれているか調査を始める。
- ⑥調査が終了したら、自分たちが立てた予想と調査結果を照らし合わせてみる。
- ⑦クラス全体で調査結果の情報を公開し合う。

(6)考察

新課程の中学校外国語科用の検定教科書は、7社から7種類出版されている。7社とも第1課 (Lesson/Unit/Program/Act) を始めるまでに、様々な導入のページを設けており、その内容は資料7に示すとおりである。当然のことながら全社においてアルファベットが導入されているが、7社中4社はパーソナル・コンピュータのキーボード (JIS配列) と合わせて提示しており、3社はTHE ABC SONGも併せて紹介している。また、特徴的なことは、アルファベットの導入以前に「英語のあいさつ」や「クラスルーム・イングリッシュ」などを先に導入している教科書が目だつことである。

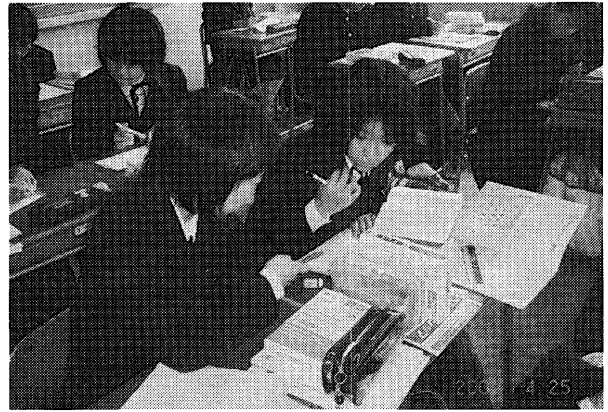
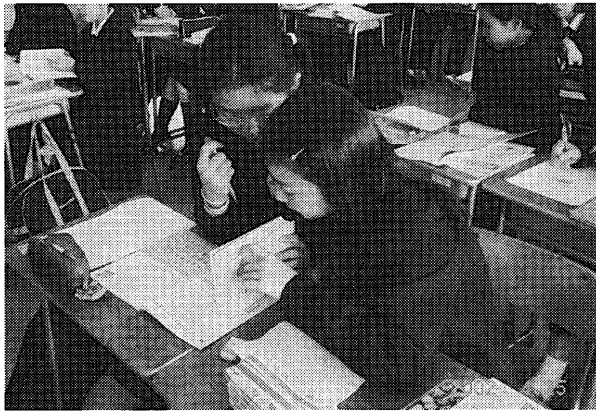
る。

こうした改訂された教科書のデザインを見ても、新しい中学校学習指導要領の外国語科の目標で提示された「実践的コミュニケーション能力」の育成を目指して、「文字 (アルファベット)」よりも「話すこと・聞くこと」などの活動を優先する潮流の影響をうかがい知ることができる。ただ、社会全体がIT化する流れに相まって、パーソナル・コンピュータのキーボード (JIS配列) と共にアルファベットを提示することは、とてもユニークな視点だと感じられるし、後々何らかの役に立つかもしれないが、初めて提示するアルファベットを、実際にキーボード操作をするわけでもないのにそれと関連づけることには違和感を感じずにはいられない。

そこで筆者は、導入期の中学1年生に是非とも身に付けてもらいたい学習スキルのひとつである「辞書の活用方法」とアルファベットの導入を関連づけるprojectを用意することにした。どのアルファベットから始まる単語が一番数が多いのか、あるいは、少ないのかを調査するだけの単純な作業であったが、開始直後はペアでワイワイと騒ぎながら作業をしていた生徒たちも、次第に真剣なまなざしで一心不乱に辞書のページを丹念にめくってページ数を数え始めた。そして、調査が終わる頃にはまた和気藹々とした雰囲気に戻ってきて、それぞれのペアの間で予想と結果の相違について活発に感想を述べ合う光景が見られた。

このprojectは、単なる“fun activity”であって、言語習得上はなんら学習を促進する機能は持っていないかもしれないが、初めて手にする和英辞典を隅から隅まで眺めてみたり、アルファベット26文字についてもすべてくまなく発音したりする活動を通じて、自然に英語の文字やその発音に親しめるという利点があったと感じられた。また、辞書指導の観点からは、このproject以後、毎時間の授業で必ず1回は辞書を引く活動を取り入れたこともあって、辞書を引く速さがどの生徒も早くなり、また、辞書を活用する姿勢や態度の素地が身に付いているように観察された。

中学1年生という導入期の指導の中でもさらに導入期にあたる4月最初の授業では、多くの検定教科書のデザインに見られるように、「英語のあいさつ」などに気軽に触れる音声活動の方がもてはやされるのかもしれないが、この辞書指導とアルファベット文字の導入を組み合わせたprojectは、音声活動を全く含まないわけでもない上に、辞書指導がスムーズに取り入れられる点におい



教科書名	NH	NC	SU	OW	TE	C21	AC
出版社名	東京書籍	三省堂	開隆堂	教育出版	学校図書	光村図書	秀文館
課の呼称	Unit	Lesson	Program	Lesson	Lesson	Unit	Act
分量	10ページ	10ページ	8ページ	8ページ	10ページ	7ページ	6ページ
内容	・英語であいさつしよう	・英語であいさつしてみよう	・Let's Start 1 英語らしく言ってみよう！	・STARTING POINT 1 クラスルーム・イングリッシュ・チャンツ	・The Alphabet (THE ABC SONG)	・Hello, Friends! (登場人物の紹介)	・英語のあいさつ
	・教室で使われる英語	・LET'S START 1 英語のアルファベットを覚えよう(キーボード)	・Let's Start 2 アルファベットで遊ぼう！ ①(キーボード)	・STARTING POINT 2 アルファベット(キーボード)	・英語のあいさつ A・B	・English Words 1・2	・Start (単語)
	・ジェスチャーを使おう	・LET'S START 2 いろいろな単語を覚えよう [1]	・Let's Start 3 アルファベットで遊ぼう！ ②(単語)	・THE ABC SONG)	・クラスルーム・イングリッシュ A・B	・The Alphabet	※アルファベット表は見返しに掲載
	・アルファベットを覚えよう(キーボード・THE ABC SONG)	・いろいろな単語を覚えよう [2]	・Let's Start 4 どんどん英語を使ってみよう CLASSROOM ENGLISH	・STARTING POINT 3 英語で言えるかな？(単語)	・身の回りの英語 A・B	・Numbers	
	・単語を言ってみよう	・LET'S START 3 読んでみよう。そして対話してみよう。		・STARTING POINT 4 アニマル・パークに行こう！(リスニング・数・動物名)		・Classroom English	
	・この教科書の主な登場人物たち						

資料7 中学1年生用新課程教科書におけるもくじ以降第1課以前の導入ページの内容一覧

註：表中の略語は次のものを表している。NH=NEW HORIZON、NC=NEW CROWN、SU=Sunshine、
 OW=ONE WORLD、TE=TOTAL ENGLISH、C21=COLUMBUS 21、AC=TOTAL active.com

て、大きな意義があると言える。

3-3 Alphabet Poster作成の授業実践

(1)課題名

Let's Make Your Alphabet Poster

(2)対象生徒

2002年度 中学1年生

A組（男子20名、女子20名）

B組（男子20名、女子20名）

(3)活動の目標

- ・ アルファベットの文字（大文字・小文字）に親しむ。
- ・ 4人グループによる協同学習を通じて作品製作を行い、鑑賞会を楽しむ。

(5)時間配当

- 1 時間目：プロジェクト内容の解説、手順の説明、資料配布、ブレイン・ストーミング
- 2 時間目：イメージ・ピクチャーの選定、アルファベット文字の切り取り、ポスター作成
- 3 時間目以降：グループ内での鑑賞会（授業の最初の約6分×2時間）

(5)プロジェクトの進行手順と内容

- ① 4人ずつのグループを構成する。生徒たちは、各自でのりとはさみを用意する。
- ② 本校の図書館で、廃棄予定の次の雑誌のバックナンバーを入手する。これらの古雑誌を、各1冊ずつグループに配布する。
 - ・『National Geographic誌日本版』（日経ナショナルジオグラフィック社）
 - ・『東海ウォーカー』（角川書店）
 - ・『週間TVガイド中部版』（東京ニュース通信社）
- ③『National Geographic誌日本版』から、文字を一切含まないことを条件に、興味を持った写真を切り抜く。アルファベット・ポスターを製作する上で、自分がイメージする「アルファベットの世界」や「英語の世界」を表現できるような写真を選ぶ。枚数や大きさについては任意である。
- ④『National Geographic誌日本版』、『東海ウォーカー』、あるいは『週間TVガイド中部版』から、アルファベットの大文字・小文字をできるだけたくさん切り取る。
- ⑤英語の授業用ノートを用意する。英語の授業用のノートは、様々なworksheetやhandoutを貼り付けることが多いため、リング・タイプ（スパイラル・タイプ）のノートを購入するように指示

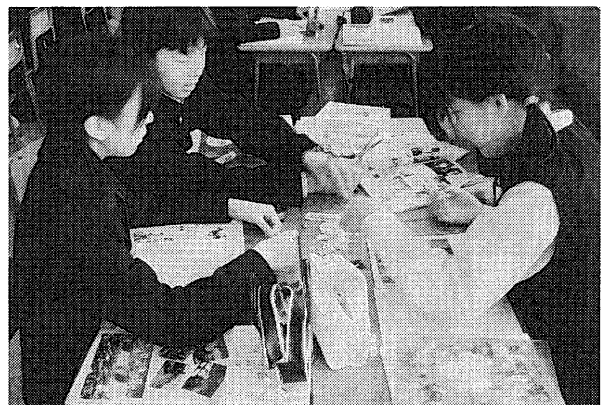
している。

- ⑥『National Geographic誌日本版』から切り取った写真と、他の雑誌から切り取ったアルファベットを、授業用ノートの表紙の裏をフィールドにして、自由に配置・組み合わせして、アルファベット（文字）と写真だけでポスターを作成する。教科書（開隆堂出版、*Sunshine English Course 1*）や英和辞典などを参照して、自分の好きな言葉をポスター上で作り出すように指示をする。自分の名前やDREAM、HAPPYなどの比較的平易な単語を取り上げる生徒が多かった。
- ⑦全員の製作終了後、グループ内で鑑賞会を開く。ポスターを披露しながら、これから英語を学習していくにあたり、どのようなイメージを「英語の世界」に対して抱いているか、自由に発表し合う。

(6)考察

最近では一部の小学校において英語教育に取り組む例も珍しくなくなってきた上、児童向け英会話スクールや学習塾も数多く存在するので、中学1年生と言えども、中学校に入学する前にすでに英語に触れた経験を持つ生徒は決して少なくはない。しかしながら、検定教科書を使用して必修科目としての外国語（英語）の授業に一齐に取り組むことは、中学1年生にとっては初めての体験なので、生徒たちが英語の授業に対して抱く好奇心や興味・関心、あるいは期待というものは計り知れないほど大きなものであると考えられる。1年間の授業を始めるにあたって、どのような角度からアプローチを始めるかは、中学1年生を担当する英語教師にとって腕の見せ所である。

平成14年度から新しい中学校学習指導要領が施行され、「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことが目標として掲げられることになったことから、「実践的コミュニケーション能力の育成＝英会話的活動の豊富な量的導入」という一義的な考え方が広まりつつあるように感じられ



る。筆者は、本校において、2000年度・2001年度・2002年度と3年連続で中学1年生を担当し、中高一貫カリキュラムの導入期の指導に当たってきたが、導入期の指導に関してはspeakingや listeningを中心とする発話的・音声的活動よりもむしろ、「文字にこだわる『逆説』の導入期指導(木下:2001)」に取り組んできた。今日、社会全体が英語を「聞く・話す」ためのコミュニケーション能力の育成やスキル獲得に関心を集中させる中、コミュニケーションの不易な成立要素を大切にする姿勢を生徒たちには身に付けて欲しいと考えるからである。

本プロジェクトも文字にこだわった取り組みの一例である。ここにおける学習活動は、アルファベットの文字の視覚的認知のトレーニングとしての効果に留まらず、音声認識と発音トレーニングとしての効果が高いことが生徒の活動の観察から明らかになった。

「生徒40名に対して教師1名」という一斉授業においては、ペア・ワークやグループ・ワークを取り入れたとしても、生徒間において十分なinteractionを生みだしにくい。しかしこの実践においては、以下に記述するように生徒同士で盛んにinteractionを行う場面が観察された。生徒たちは自分の作りたい単語を構成するアルファベットの文字が、自分が切り取った雑誌記事の文字から見つからない場合、グループ内のクラスメート、あるいは自分のグループを越えて他のグループのクラスメートたちと、次のようなやりとりを行っていた。

生徒A:「Pある? P!」
 生徒B:「あるよ、はい。」
 生徒A:「ちがう! Tじゃなくて、P!」

生徒C:「誰かd持っている?」
 生徒D:「あるよ~! はい。」
 生徒C:「それ、bじゃん! dだよ、d!」

生徒E:「アールちょうだい!」
 生徒F:「ん....、私持っていないな~。」
 生徒E:「どれどれ....、あるじゃん、r!」
 生徒F:「これって、アールなの?」
 生徒E:「小文字なんだよ、これは。」
 生徒F:「えっ? そうなの?」

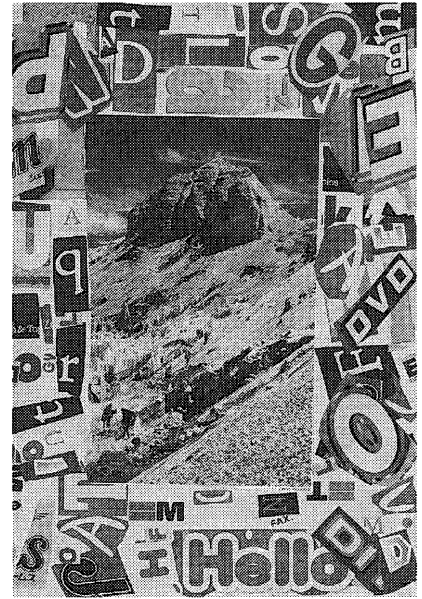


また、筆者はこのポスター作りの課題を協同学習として捉えた。確かに、実際には生徒たちは個人個人で自分のノートにポスターを製作しているので、「個人活動」のように思われる。しかし、その過程においてはグループの仲間や他のクラスメートと上記のような会話を中心としたinteractionを行わなければならない上に、切り取った文字のトレーディングを通じて協調・協同・共同したりして、スムーズなコミュニケーションと「仲間作り」が行われていた。英語授業が生み出した思わぬ副産物的効果である。

英語学習の観点から更に述べると、このプロジェクトの取り組み過程においては、以下に指摘するような3つの肯定的な効果が生み出されていたと思われる。

1点目は、生徒たちに「積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢や態度」を身に付けさせることが促進できた点である。「みなさん、今日から英語の授業が始まります。英語の時間は積極的に会話をして、コミュニケーションを取りましょう」とただ語りかけるだけでは、生徒たちはその必然性や必要性を見いだすことはできないであろう。アルファベットという文字を扱った単純な活動ではあるが、仲間と自然にコミュニケーションを図ろうとする動機は高められたと考えられる。生徒たちは、日本語混じりではあるがアルファベットの発音活動(練習)にintensiveに取り組んでいた。「会話」と呼べるものよりはprimitiveではあるが、主体的、かつ、積極的にコミュニケーション活動を行っており、自らコミュニケーションを図ろうとする姿勢や態度を培うことができたと言えよう。

2点目は、雑誌からさまざまな大きさ、書体、色のアルファベットを切り取る活動を通じて、「おなじGでもいろんな活字があるんだな」と驚いたり、「qって、なかなか見つからないなあ....」という発見をしたりすることができた。こうした



ことを積み重ねたことによって、アルファベットの文字そのものの形に興味を持ったり、大文字と小文字を区別したりする認識力を身に付けたりすることに一役買ったと思われる。

3点目は、ポスターを作るというfun activityを通じて、自分が求めている文字をスムーズに見つけたいがために、意識してより正確なアルファベットの発音をする姿勢が身に付いたことである。クラス全体が協同作業を行うザワザワとした教室では、それなりに大きな声を出さないと相手に聞き取ってもらえない。さらに、「p・t・b」や「g・z」、「m・n・l」、「b・v」などのように、日本人にとって聞き分けにくい文字の発音を相手に聞き取ってもらうには、かなりの努力が必要であった。

(7)今後の課題

以上のような効果を生みだしたこのプロジェクトは、協同学習的活動をベースにした優れた取り組みであったと自己評価するに至っている。筆者が以前に公立高等学校に勤務していた時には、高校1年生の4月最初の授業においては、1時間、英語による授業（担当者の自己紹介を含む）を行い、「使うための」また“使える”英語学習に取り組むことを熱心に説いたものだった。あくまでも音声から入り、「話せること」「聞けること」を優先する価値観を押しつけすぎていた嫌いがあった。しかし、本活動においては、音声よりもむしろ、「文字」からアプローチを始めることによって、発展的に「音声」についても親しむことができた。

一方、いくつかの課題も残された。生徒作品の中には、「好きな言葉」や「自分の名前」などを取

り入れて、何らかのメッセージ性のあるポスターを製作した生徒と、まったく意図を持たず、単に「切り張り」だけを“こなした”生徒がいた。本プロジェクトの趣旨が授業者側でいまひとつ明確にされていなかった点が悔やまれた。

また、全員の製作終了後、グループ内で鑑賞会を開いたが、個々の作品にはテーマやメッセージが込められていない場合が多かったため、単にポスターを「見せ合った」だけの鑑賞会になってしまい、意見やコメントの交換しようがなかった。仮に、各自が「好きな言葉（の英訳語）」を必ずポスターに含めていたならば、もう一歩踏み込んだ活動に発展したのではないかと考えられるので、この点についてもひとつの課題として認識しておきたい。

3-4 Photo Languageの授業実践

(1)課題名

A Picture Talks. (Photo Language)

(2)対象生徒

2002年度 中学1年生

A組（男子20名、女子20名）

B組（男子20名、女子20名）

(3)活動の目標

- ・既習の文型を用いて、簡単な自己表現および体験に基づく説明的記述ができるようになる。
- ・お気に入りの写真を題材として、英語でStory Tellingが出来るようになる。
- ・クラス全体の前で英語で発表をする活動を通じて、public speakingのマナーや方法について知る。
- ・Photo + Descriptionを一体化させた作品製作を行い、生徒相互に鑑賞する。

(4)時間配当

- 1 時間目：プロジェクト内容の解説、手順の説明、資料配布、Key Sentencesの確認。(25分)
- 2 時間目：自分が持参した写真の解説文の下書きを行う。教師による添削を受ける。
- 3 時間目：写真の説明文の原稿清書。音読練習。(25分)
- 4 時間目以降：グループ内での発表会。(授業の最初の5分×4時間)

(5)プロジェクトの進行手順と内容

- ①生徒に、自分の一番のお気に入りの写真を1枚持参するように指示する。その際、「必ず自分が写っていること」を絶対条件とした。
- ②持参した写真について、日本語の説明(解説)文を5つノートに書き留める。
- ③既習のKey Sentencesの復習と確認を行う。
 - ・ I am Yuki. (p.14)
 - ・ You are from Canada. (p.16)
 - ・ I'm from Japan. (p.17)
 - ・ This is my friend, Li. (p.18)
 - ・ Is this your room? (p.20)
 - ・ Is that a restaurant? (p.21)
 - ・ It's a hotel. (p.21)
 - ・ He's a high school student. (p.22)
 - ・ She's in France. (p.23)
 - ・ This is my house in Brazil. (p.24)
 - ・ It's beautiful. (p.24)
 - ・ My name is Mike Brown. (p.28)
 - ・ I like sports. (p.29)

※ () 内のページ数はSunshine English Course 1 (開隆堂出版:2002) における初出箇所を表している。

- ④自分が作った写真の解説文が、Key Sentencesを用いて表現できないか検討する。複雑な説明文を書いている場合は、単文に直し、simpleな英文になるように推敲する。
- ⑤4人ずつのグループに分かれ、和英辞典・英和辞典・教科書を用いながら、各自の原稿を英訳していく。
- ⑥出来上がった原稿を読んでみて、英語でタイトルを付ける。
- ⑦教師による個人添削を受け、基準を満たした原稿が作れた生徒は、音読練習を始める。未習の英単語や表現については、教師の指導を受ける。
- ⑧全員の原稿が完成したら、音読練習を経て、グループ内で発表会を行う。

(6)考察

“Photo Language (フォトランゲージ)” とは、

「写真をただ眺めるのではなく、じっくりと観察し、また、情景からにじみ出るメッセージや状況の背景を感じ取り、写真に写った場面が持つ意味を読み解く活動」として、一般には広く開発教育の現場で用いられるアクティビティである。戦争や難民などに関わる写真を提示し、写真に見られる実物証拠を丁寧に取り上げ分析するだけでなく、自由に推理を働かせて、問題についての活発な話し合いや深い思考へ入るきっかけを得ようとするのである。開発教育の文脈では、この活動は、1枚の写真から分析的・推測的Story Tellingを行うことによってすることによって、生徒たちに誤解や偏見に気づかせたり、彼らの持つ共感的理解力、想像力、批判的思考力などを高めさせることができると考えられている。

筆者が行った授業実践においては、このPhoto Languageの方法論のみを特に取り上げ応用したプロジェクトを行った。英語教育の授業実践において、開発教育や国際理解教育などとの関わりを意識し、平和や環境問題、あるいは人権問題などを対象にした真の“Photo Language”の活動を行うことも可能であろう。実際に、最近の英語の教科書においては異文化理解的な題材にとどまらず、開発による自然破壊や酸性雨などの話題を扱った環境問題や、戦争や人権に関わる平和学習の題材も豊富に取り入れられているので、英語学習の実践現場に開発教育を導入する余地は十分にあると言える。

しかし、あまりにも高度化・複雑化する社会の様相をそのまま教科書の題材に“盛り込む”現在の検定教科書編集の傾向に対して、筆者は疑問を感じている。題材にオーセンティシティ(authenticity)を求め、話題に対する生徒たちの興味・関心を高揚し、情報の新しさなどを重視することは、学習者に対する内発的学習動機付けを与えることに一定の効果をもたらすであろう。ところがその一方で、新しい学習指導要領で謳われている「実践的コミュニケーション能力の育成」を目指すとき、あまりに高度な題材では、生徒たちが自ら問題を自分のものと認識した上で、何らかのメッセージを表現する言語活動につなげることはかなり困難である。特に、中学1年生という導入期の指導においてはなおさらである。

市川伸一(2002)も次のように指摘している。「考えてみると、これからの子どもたちはたいへんな課題を背負わされている。単純な仕事はどんどん機械化され、人間はより高度な知的情報処理をすることが求められる。環境問題、エネルギー

問題、財政赤字問題など、これまでの社会が不幸にも蓄積してきた諸問題を、あたかも他人の負債を払わされるように、解決することが求められるのである。」

そこで、筆者はPhoto Languageに用いる写真は、「必ず自分が写っている写真」と限定することにした。それによって、生徒たちが自らの実体験やそれに基づく感想などを「表現したい」と自発的に取り組めるのではないかと考えた。

結果として、中学入学後、初めての「自由英作文」の活動であったにも関わらず、生徒たちは次々と原稿のアイデアをふくらませ、自分の体験（描写）や感想を生き生きとした英文を作って行った。中学校に入学してまだ間もない時期であったため、小学校の卒業写真や6年生の時の修学旅行の時の写真を持ってくる生徒も多く、思い出の感動を蘇らせるのに問題は無いようであった。開発教育で用いられているPhoto Languageという活動ではあるが、ここでの題材の設定の仕方が功を奏して、英語の授業における導入期の表現活動として発展的に展開することができた。

また、今回も4人1組のグループワークという形式を取ったが、英和・和英辞典を活用し、生徒相互に助け合いながら作業を進めることができた。個人個人が1つの作品を作る活動であっても、「学び合い」「助け合い」の観点からは、グループでの作業形態はとても有効であることが生徒の観察からわかった。slow learnersもグループ内の友だちの助けを得て、全員期限内に作品を完成させることができた。

以下に、生徒の作品のいくつかを紹介したい。センチメンタルなものもあれば、ノスタルジックなものもあり、それぞれの生徒が大切にしている思い出が生き生きとした英文に現れている。なお、原文のまま掲載してあるので、綴りや文法の間違いについては無視してある。

生徒作品① Treasure

This is a graduation photo.
He's my best friend.
We played baseball.
He gave me a mechanical pencil.
This is my treasure.

生徒作品② entrance

I was nervous.
This is an entrance day.

They are new shoes.
It was spring.
This day was a long day.

生徒作品③ LAST SUMMER

She is my best friend.
It was last summer vacation.
We go to other junior high school.
But we don't miss each other.
Because we are best friends forever.

生徒作品④ MY FRIENDS

We sent on a school excursion.
This is in Kyoto.
This is my friends. This is a Todaiji.
It was Novemder. (←ママ)

生徒作品⑤ My memories

I play baseball.
This is Ichiro's cup tournament.
This is my best batting.
We won the first prize in the tournament.
It was in a hot summer.

(7)今後の課題

このプロジェクトにおいては、初めての英作文による表現活動が中心となった。本実践の結果から、導入期における英作文指導には、具体的に以下に指摘する4つの問題点があった。

ア. 既習の文型だけで表現することに限界がある。Photo Languageの取り組みは、生徒に好評であった。「とっておきの1枚」とでも言うべきお気に入りの写真を生徒は用意しているので、「言いたいこと」や「伝えたいこと」が山ほどあるようであった。また、たいていの場合、かなり複雑な内容を表現したが、英文をなるべくsimpleなものにするような支援の仕方が難しかった。既習の文型にこだわると退屈になる一方、制限を設定しないと複雑になりすぎる。この点に関してバランスの取り方を検討する必要がある。


イ. 和英辞典の利用法の指導を徹底する必要がある。中学校に入学したばかりの生徒たちだけに、そもそも英和辞典の使い方もままな

Meidai Fuzoku Junior High School
The 1st Grader

May 2002
Project III

~ Photo Language ~

[Title]
Kazunori & Taro



This is three years ago picture.
This is my house's veranda.
This is my pet dog, Taro.
Taro was three years old.
I was happy.


Class: **B** No.: **35** Name: _____

Meidai Fuzoku Junior High School
The 1st Grader

May 2002
Project III

~ Photo Language ~

[Title]
School excursion



We are in Kyoto.
It was autumn.
I'm tired.
But I'm happy.
It was a brief time.

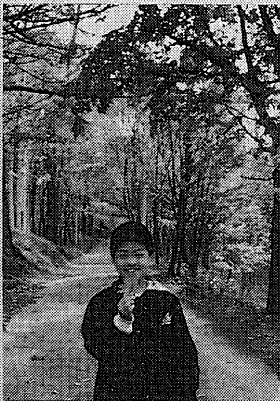
Class: **B** No.: **22** Name: _____

Meidai Fuzoku Junior High School
The 1st Grader

May 2002
Project III

~ Photo Language ~

[Title]
Hokkaido university



I was walking
This is Hokkaido university
It was autumn
I was the third grader
It was cloudy

Class: **A** No.: **15** Name: _____

Meidai Fuzoku Junior High School
The 1st Grader

May 2002
Project III

~ Photo Language ~

[Title]
Summer festival.



We were ten years old.
We are friends.
This is a summer festival.
This is Tateno shrine.
We are the shinto priestess.

Class: **A** No.: **23** Name: _____

らないにも関わらず、和英辞典の使い方を十分に指導しないまま、グループに一冊貸し出してしまった。和英辞典が活用できなかった生徒も多いようであったし、逆に、和英辞典の例文（英文）をそのまま転記する生徒も見られた。

ウ. どこまでaccuracyを追求するかが明確ではなかった。綴りの間違いや文法の違い、語やフレーズの選び方など、「英作文」の観点から考えると、生徒作品に見られるmistakesの存在は無視できない問題である。今回は初めての自由英作文の取り組みであったので、「文の最初の単語の、最初の文字は大文字で書く。」ことと、「ピリオドやクエスチョンマークは必ず付ける。」「Key Sentencesをなるべく活用する。」という3点だけは徹底したが、それ以上の点については細かくチェックしたり、指導したりはしなかった。生徒の作品から誤答分析を行い、間違いを犯す傾向を探りたいという意図があったのではあるが、厳密にaccuracyを追求しないまま、口頭発表を行ったりしたことは、ある意味大いに問題であろう。「間違いを恐れず、どんどんと自由に表現してみよう」という言葉による働きかけの責任の取り方について検討する必要がある。

エ. Photo Languageの説明文の口頭発表において、未習の英単語や表現の発音・イントネーション・アクセントなどを、“個々”の生徒たちに、“個々”の箇所について提示してやる必要があった。この作業にかなり多くの時間と労力が必要であった。そのことよりも問題であったのは、せっかくそうして努力して上手に読めても、発表を聞いている生徒にしてみると、理解が出来ない箇所が多々あったようである。

新しい学習指導要領においては、旧学習指導要領と比較すると、学習内容が大幅に削減されており、学力低下を招くのではないかという議論がいまだに続いている。文部科学省は、学習指導要領はひとつの「最低限度」を示した「基準（標準）」であり、その内容をふまえていれば、学習内容を弾力的に発展させても良いという趣旨の見解を述べたことがあった。しかし、こうした英作文などの表現活動においては、教科書に書かれていることをどこまで発展させるかという“程度”や“基準”を設定することは、決して容易ではないと実感されるに至った。

3-5 Original Poem Recitationの授業実践

(1)課題名

My Family (Enjoy Recitation)

(2)対象生徒

2002年度 中学1年生

A組（男子20名、女子20名）

B組（男子20名、女子20名）

(3)活動の目標

- ・教科書のPROGRAM 6のキーセンテンスである Nancy likes oranges too. (p.48)の内容と文法事項（3人称単数現在形）について知り、それを自己表現活動において使うことが出来るようになる。
- ・キーセンテンス及び既習の文型を用いて、簡単な英詩を創作する。
- ・完成した英詩を何度も音読練習し、気持ちを込めて丁寧な発音で読み上げることが出来る。
- ・英詩を暗唱発表する活動を通じて、パブリック・スピーチのマナーについて知る。
- ・友だちの英詩の発表を聞き、鑑賞する態度を養う。

(4)時間配当

1時間目：プロジェクト内容の解説、手順の説明、資料配布（model文）、Key Sentencesの確認。英詩の創作。

2時間目以降：授業の最初の約10分×3時間。

(5)プロジェクトの進行手順と内容

①モデル文を提示する。（授業者による暗唱）

タイトル	→	My Family
作者	→	by Masahito Kinoshita
本文①	→	My family is very small.
本文②	→	We live in Higashi-ku, Nagoya-shi.
本文③	→	There are three people in my family.
本文④	→	I study English every day.
本文⑤	→	My wife loves cooking.
本文⑥	→	My son likes Anpanman.

②モデル文のtranscriptが書かれたワークシートを配布し、モデル文のフォーマットについて説明する。

- ・タイトルを必ずつける。“My Family”をベースとして、自由にアレンジをしても良い。
- ・作者名も原稿の中には明記する。
- ・本文①の“My family is”までは全員共通。そ

れに続く形容詞を検討するように生徒に指示を出す。

・本文②の“*We live in*”までは全員共通。それに続けて自分の住所に関する情報を付け足す。動詞*live*は教科書においては未出であるが、4月に自己紹介活動を行った際に導入済み。

・本文③の“*There are* *people in my family.*”は全員共通。自分の家族の人数をに入れるだけ。

・本文④は、“*I*”を主語にして、一般動詞を含んだ英文を作る。

・本文⑤と⑥は、家族の構成員の誰でも良いので、一般動詞を含んだ紹介文を作成する。

③4人1組のグループに分かれ、和英辞典と英和辞典を活用しながら原稿を作成する。

④自分が作成した詩(英文)の音読練習をし、暗記してくる。

⑤クラスで何回かに分けて発表会を開く。

(6)考察

本projectの目的は、学習した文法事項の復習とconsolidationでありながら、英詩の暗唱発表というパブリック・スピーチに取り組む機会を設けたことである。2000-2001年度は、教科書に掲載されていた谷川俊太郎の「私って何だろう」の英訳を暗唱発表していたが、今年度は少しレベルをアップして、自作の詩を暗唱するというprojectに発展させた。授業者が設定したフォーマットやモデル文は極めて単純なものであるが、タイトルから内容に至るまでをpersonalizeさせることによって、生徒たちは生き生きとした作品を創作していた上に、聞いている生徒たちの方にも「へえ、そうなの!」という驚きや笑いのリアクションが頻繁に見られ、1人わずか20秒程度の発表であるにもかかわらず、インパクトが強く、内容の濃い取り組みとなった。

この段階ではrecitationでしかないが、こうした取り組みを前期のうちに経験しておくことによって、さらに高度な口頭での自己表現活動の展開が可能になるものと思われる。本projectはその予備的活動として位置づけられる有意義な取り組みであると言える。

4. シラバスデザインの今後と課題～まとめにかえて～

本稿においては、前半部分において導入期における英語の授業のあり方とその理念に関わり、シラバス・デザインの観点から方法論的な考察を進め、後半部分

は、前半部分で述べられた理念や理想を具現化するとどのようになるのかについて、実践報告を中心として「Long Term Projectsでつなぐシラバス・デザイン」の実際を紹介してきた。

このようにシラバス・デザインにこだわる授業方法・授業改善・教授法開発は、ある意味では、中学1年生という導入期の生徒に「いろんなことを、一通り、浅く体験させる」ことだけを意図した授業スタイルではないかと誤解されることがあるかもしれない。しかし、同様のシラバスは中学1年生のみならず、中学の上級学年や高等学校においてさえも十分導入が可能なものではないであろうか。それぞれの学年のメンタリティーや生徒の知識・スキル量、あるいは学習経験に応じて、同様のprojectであっても複雑さや深さが異なってくるだけで、“Same Task, Different Activity”の考え方に沿った展開が可能であろう。本校でも、中高一貫6年間にわたるシラバスを構築しようと作業が始められているが、この「Long Term Projectでつなぐシラバス・デザイン」が何らかの有益な示唆を与えることができるのではないかと期待している。中高一貫校であるがゆえに、「6年間という長期にわたって、この学校ではどのような英語の力を、どのような方法によって生徒に身につけさせてやるか」というビジョンや理念作りは、英語科全体で常に確認していくことが必要であろう。例えば、Show&Tellの活動を、単発的にどこかの学年で取り組むだけではなく、中1では中1なりの取り組み方で、中2になれば中2らしい水準で、また、中3になればさらに応用的に……、という段階的でスパイラルな形で学習経験を積み上げることができる“仕掛け”を用意することができれば、生徒は6年間で大きなものを獲得し、また、磨き上げることができよう。

引用文献

- ・安藤昭一編(1991)『英語教育現代キーワード事典』増進堂。
- ・市川伸一(2002)「新しい時代を創る生徒を育てる新教育課程への期待」『中等教育資料』4月号、文部科学省。
- ・小田勝巳(2001)『子どもの成長を促すポートフォリオで学力形成』学事出版。
- ・木下雅仁(2001)「文字にこだわる『逆説』の導入期指導」『ジーニアス・クリッパー・ディパーチャー 英語通信』No.25、大修館書店。
- ・高橋勝義(2001)『ポートフォリオ評価法入門』明治図書。
- ・新里真男(2001)「実践的コミュニケーション能力」『英語教育』10月号、Vol.50、No.7、大修館書店。

- ・Nunan, D. (1999) *Syllabus Design*, Oxford: Oxford University Press.
- ・樋口忠彦・並松善秋 (2002)「元気が出る英語授業のすすめ1 新入生を迎える」『英語教育』4月号、Vol.51、No.1、大修館書店。
- ・松畑熙一 (1992)『自ら学ぶ力を育てる英語授業―自己教育力の養成を目指して―』研究社出版。

参考文献

- ・山極隆解説 (1999)『高等学校学習指導要領 平成11年3月・文部省告示』時事通信社。
- ・木下雅仁 (2001)「新学習指導要領にもとづく英語科教育の目的と教科書における題材観～異文化理解を焦点にして～」名古屋大学教育学部附属中・高等学校『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第46集。
- ・木下雅仁 (2001)「物語教材を使ったクライマックスを意識する読みの指導―Sunshine Readingsを題材に―」開隆堂『英語教育』Vol.53-2 通巻488号。
- ・木下雅仁 (2002)「学習動機付けを高める導入期のシラバス・デザイン～中学校新課程用SunshineEnglish Course 1の活用に向けて～」開隆堂『英語教育』Vol.54-1通巻491号。
- ・B.D.シャクリー、N.バーバー、R.アンブローズ、S. ハンズフォード著、田中耕治監訳 (2001)『ポートフォリオをデザインする 教育評価への新しい挑戦』ミネルヴァ書房。
- ・鈴木敏恵、岸川央、吉塚憲博、金井義明、武一正、澤栄美、柴田巧 (2001)『ポートフォリオで評価革命！―その作り方・最新事例・授業案―』学事出版。
- ・望月昭彦編著、久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司著 (2001)『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店。
- ・木下雅仁 (2002)「Long Term Projectsでつなぐ導入期の授業デザイン」三省堂『英語教育・中学別冊』第13号。
- ・木下雅仁 (2002)「生徒の学力差を見きわめるには―1学期末、ここに注目する 高校の場合」大修館書店『英語教育』7月号Vol.51、No.4。
- ・JACET教育問題研究会編 (2001)『英語科教育の基礎と実践 [改訂版] 新しい時代の英語教員をめざして』三修社。
- ・西岡尚也 (1996)『開発教育のすすめ 南北共生時代の国際理解教育』かもがわ出版。
- ・Nunan, D. (1989) *Designing Tasks for the Communicative Classroom*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ・White, R.V. (2001) *The ELT Curriculum*, Oxford:Blackwell.
- ・町田隆哉・山本涼一・渡辺浩行・柳善和 (2001)『新しい世代の英語教育 第3世代のCALLと「総合的な学習の時間」』松柏社。
- ・望月昭彦編著、久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司著 (2001)『新学習指導要領にもとづく英語科教科教育法』大修館書店。
- ・Munby, J. (1997) *Communicative Syllabus Design*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Melrose, R. (1995) *The Communicative Syllabus A Systematic-Functional Approach to Language Teaching*, London: Pinter.
- ・Read, J.A.S. (ed.) (1984) *Trends in Language Syllabus Design*, Singapore: Singapore University Press for SEAMEO Regional Language Centre.
- ・笠島準一他 (2002) *New Horizon English Course 1* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、東京書籍。
- ・佐々木輝雄監修 (2002) *ONE WORLD English Course New Edition 1* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、教育出版。
- ・島岡 丘・青木昭六監修 (2002) *Sunshine English Course 1* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、開隆堂。
- ・東後勝明他 (2002) *COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、光村図書。
- ・TOTAL ENGLISH編集委員会編 (2002) *TOTAL ENGLISH New Edition 1* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、学校図書。
- ・森住衛監修 (2002) *NEW CROWN ENGLISH SERIES 1* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、三省堂。
- ・渡部昇一他 (2002) *TOTAL active.com ①* (文部科学省検定済 中学校外国語科用教科書)、秀文館。

(注) 本稿は、財団法人日本英語検定協会主催の第15回「英検」研究助成の実践部門における「Task-based Syllabusの開発と総合的英語運用能力の育成―導入期の指導に焦点をあてて」の研究の成果の一部である。